



「英語の教え方教室」勉強会 簡易報告

- 第 38 回：新しい英語教室の創造：“反転授業”の理論とその実践
- 第 39 回：教職フィールドワーク(英国) 報告・課題研究発表 in English
- 第 40 回：私の授業実践—自己効力感を高めたい「英語表現 II」
- 第 41 回：生徒の英語力を鍛える小テスト・定期考査などの問題づくり、授業での問いかけの工夫

報告：中井弘一

第 38 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 27 年 7 月 18 日(土)

「新しい英語教室の創造：“反転授業”の理論とその実践」

大阪教育大学大学院生・大阪府立大学工業高等専門学校講師
谷野圭亮



「説明型の講義など基本的な学習を宿題として授業前に行い、個別指導やプロジェクト学習など知識の定着や応用力の育成に必要な学習を授業中に行う教育方法」とする反転授業を谷野さんが高専で実践されたのには、一つに英語の授業単位数と 45 分 2 コマ連続授業が週に一度という授業形態にも起因している。Bloom's taxonomy of cognitive goals (1956) の思考回路を取り上げられ、授業で行える活動は下位レベルの知識 (knowledge)、理解 (comprehension)、応用 (application) に留まり、思考の上位の分析 (analysis)、統合 (synthesis)、評価 (evaluation) のレベルを行うことまではできないので、下位レベルの活動を反転授業で行うことで授業では上位思考レベルの活動を行うことができるのではないか、それによって、生徒によってばらばらな予習内容を統一できると考えられた。

反転授業は active learning の一方法である。生徒の自主的・自律的な学習を求める active learning は講義形式からの脱却を基本理念としている。反転とは言え、講義動画を事前に与えることは講義形式からの脱却とはなり得ていないのではとフロアーからの問いがあった。講義形式が all bad ではないにしても、講義動画事前視聴は結果的には「やらされている感」が残ると思われる。生徒から指導者の顔が見えない動画は良くないとの評価を受け、板書した本文を徐々に説明するスタイルに変えられた。最終的にはどちらの展開でも変わらないと生徒のコメントを得たとのことであった。

また、iPad を使い “Edmodo” という SNS アプリをダウンロードして、動画を配信する方法を説明してもらい参加者で体験した。“Edmodo” には次のような特徴があって、授業や学習活動に取り入れやすいとのことであった。

- 1) 閉鎖的なコミュニケーションシステム
- 2) 生徒から先生以外の個人宛てには投稿できない (グループへの投稿は可)
- 3) グループの平場でのやり取りが基本
- 4) グループにはスモールグループ (班) を複数つくることができる
- 5) 生徒登録にメールアドレスは必要ない
- 6) ファイル、リンク、ライブラリ/バックパック (情報保管場所) を添付投稿できる
- 7) 「課題」「アンケート」「クイズ (小テスト)」「アラート (緊急連絡)」機能がある
- 8) iOS と Android アプリが用意されている
- 9) 「アラート (緊急連絡)」はアプリに対してプッシュ通知できる
- 10) 様々なコンテンツが Edmodo 対応している (英語のみ)

反転授業のまとめとして、反転授業は手段であって目的ではない、反転授業は Re-active learner を Pro-active learner へつなげるものでないかと述べられた。先を考える意欲的な教員と生徒であればいいのだが、inactive learner を見捨てることはできない。inactive learner であっても教育を通して学びの姿勢を持たせることが必要である。反転授業こそ、そうした生徒のためにもあるものとするなら、どのような内容を反転として生徒に提示することが大切なのであろう。教員が思いを込めて作成した予習プリントを配付しても生徒はやってこない。SNS に感化されている生徒は、この方法で提示されると連帯感を持って予習してきてくれると思うと話される参加者もいた。反転授業は予習と簡単に片付けていいものではないだろう。



第 39 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 27 年 10 月 17 日(土)

「教職フィールドワーク(英国) 報告・課題研究発表 in English」

大阪女学院大学 学生 豊福 良子、重川遥香 教授 中井弘一



本年度 9 月に 2 週間ほどの旅程で実施した本学「教職フィールドワーク(英国)」の指導の一環として、二人の参加学生が発表報告活動を行った。現地中学校で行ったプレゼン内容を紹介とともに、「街角観察」「創作教材」「現地中学校の授業観察」の 4 点について一人 40 分間英語で発表した。現地の中学校で行ったプレゼンテーションでは以下のようなスライド (一部) を使って日本の紹介を行った。



マナー・スクールの授業を通して気づいたことは以下のとおりである。

- No school bells. Students move to a different classroom depending on their own schedule.
- Students do not come in a classroom until a teacher comes.
- Students have their own iPad.
- Students use a pen.
- A screen for a projector is installed in each classroom.
- Small class (about 15-25 students in a class)
- Teaching speed in each class is rather slow.
- A lot of activities to foster thinking are introduced in a class.
- Students have a strong sense of responsibility.
- They have good relationship among teachers.
- Teachers and students also have a good relationship.
- Every student pays attention to the same topic. ⇒ can make sure that everyone understands.
- Teachers can add some materials easily. ⇒ Teachers can show pictures, show videos, make sounds...etc.
- Most of the teachers make their students think by themselves.
- The teachers ask the students a lot of questions.
⇒ The students don't lose their interests.
- The teachers always ask the reason for the students' answers.
⇒ The students can understand the contents deeply.



第 40 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 27 年 11 月 16 日(土)

「私の授業実践—自己効力感を高めたい“英語表現Ⅱ”」
滋賀県立安曇川高等学校 杉浦 悠真 教諭



杉浦先生は、これまで文法問題集を解く文法訳読式・教師が一方的に話す講義形式であった以前の授業形態から、次の2点を中心とした授業に挑戦されてきた。

- 音読や1分間スピーチ、プレゼンテーションなどのスピーキング活動を取り入れる。
- エッセイライティングなどのライティング活動を行う。(9月現在、生徒が書いたエッセイをペアで紹介し合う→ペアの意見を聞き取りメモする→ペアのエッセイや意見について質問する活動を実施)

杉浦先生は、自身の高校在学時に、自分はどうせやっても無理だと英語学習に挫折した経験から、自分もやればできるんだという自己効力感(Self-efficacy Theory: 1. 達成感・達成体験 Enactive Attainment 2. ロールモデル・代理経験 Vicarious Experience 3. 他者からの激励・言語的説得 Verbal Persuasion 4. 不安解消・生理的情緒の高揚 Emotional Cues, Bandura 1977)の発揚を自身の指導理念として、英語学習や勉強に対してのモチベーションが低い生徒に「授業を興味深いものに」する実践活動を報告された。自己効力感とは、自己に対する信頼感や有能感で、人がある行動を起こそうとする時、その行動を自分がどの程度うまく行えそうかその予測の程度によって、その後の行動の生起は左右される。「自分にはここまでできる」という思いが行動を引き起こすことが“自己効力感” self-efficacy である。

杉浦先生は、普通科2年生の英語表現Ⅱで、「生徒が英語を使う場面を増やす」をねらいとし、英語を使う場面として、「音読 / 1分間スピーチ / 簡単なプレゼンテーション・エッセイライティング / エッセイの意見交換・質問」などを授業に取り入れられた。新採教員として、何かに取り組ませたいと思う情熱が感じられた。

授業展開は、
予習：単語の意味調べ・例文作り Pre-Reading Questions
授業：本文内容理解(構文・文法説明) 本文の音読 確認問題
課題：本文のテーマに関わるエッセイライティング
という構成であった。

音読は、教科書本文または構文を Blank Reading Sheet を使って、日本語→英語 英語→日本語でペア練習をさせているということであった。こうした形式の音読練習をよく見かけるが、音読が主たる目的なのか、日本語に応じた単語挿入が目的なのか、実際の効果をねらう目的が明確でないことが多い。生徒自身が何のためにこの活動を行い、どのような力が付くことが期待されるのかを明示する方がいいのではと思われた。

- 次に1分間スピーチについて話して頂いた。
- 英語を口から出すことに慣れさせる。
 - 正確さより流暢さを重視。とにかく1分間話し続ける。
 - ロールモデルを見せる。
 - スピーチやライティングの型を落とし込む。

という構成で、各自1分間スピーチの内容検討に1分間、各自の音読に1分間、パートナーへの相互スピーチに2分間(1×2)もう一度各自音読で1分間、最後に指名された数名が代表スピーチと10分間の活動ということであった。フォーマットのようなものを与えるが、箇条書きのみで、口頭で行うことを主としているということであった。下書きなどさせると時間がかかり、またあとの点検に時間を要するというので、このスピーディな手法には参加者は驚いた。文法よりスピーチを行うことを主眼としているので、英語の誤りには寛容であるとのことであった。1分間で行うには、先に問いかけとその回答を即座に述べてから、その理由を述べると効果的である。

このあと、エッセイライティングについて話された。

- 各レッスン毎、テーマを決めて
- 学習した構文・文法を実際に使って50語以上でまとめる
- ペアやグループ内での意見交換・質問(段階を踏みながら)



第 41 回「英語の教え方教室」勉強会
平成 27 年 12 月 12 日(土)

「生徒の英語力を鍛える」
—小テスト・定期テストなどの問題づくり、授業での問いかけの工夫—
京都市立西京高等学校 西村 久仁美 教諭



西村久仁美先生に、理解を促進し生徒の英語力を鍛えるという観点から、定期考査での出題問題の疑問点・課題点を指摘していただいたりして、西村先生が考える問題作成の取り組み姿勢や考え方を紹介してもらった。

まず、定期考査について、何のためにテストを行っているのかを確認された。

- (1) 評価するため…手段
- (2) 到達度を確認するため…評価の手段、授業の反省
- (3) 学習(授業・自宅)への波及効果のため…一番大切な目的 生徒の家庭学習、意欲への源→「勉強させるためにテストがある」と話された。

テストは、生徒へのフィードバックであり、また生徒と教員の双方へ波及効果がある。教員にとっては今後どのような指導が必要か、生徒にとってはどのような学習を行えばよいか、これらの上にテストの作成がある。到達度を確認するためであるとのことである。到達度とは、何らかの教育プログラムの中で学習者が一定期間の学習によって到達した学習成果であり、①シラバス・内容アプローチ(syllabus-content approach)と②目標準拠アプローチ(objective-based approach)があり、それぞれ、「授業で扱った教材や内容をそのまま用いてテストを作成する」と「授業で扱った教材そのものではなく、指導目標にまで遡ってテストを作成する」があり、生徒が学習した内容をどれくらい理解しているかを考え、学習した本文テキストをそのまま提示して行うテストと、初見のテキスト本文を使って学習事項を問うテストがある。西村先生は、中学校指導時の方がテキスト本文をアレンジしたり独自の英文を使ってテストを作成したりすることが多かったが、高校生が相手になると本文の内容のレベルや同僚教員との擦り合わせなどを通して、本文テキストを使うことが多くなったということであった。

次に、「問題の作成について」を話された。

- (1) 授業の目標…1年、3年後にはどういことができるのか cando リスト 作成が目標になっている
- (2) テスティング・ポイント…何を測るためにその問題があるのか
- (3) 問題形式…大問ごとに明確にする 解答用紙にタイトルをつける can-do 評価は各学校で作成義務を負っているようであるが、生徒に示される can-do 評価に基づいてテストが作成されることはあまりないようである。

そして、これまでに出題されたテスト例をたくさん紹介して頂いた。特に、英文に日本語を付さないことを念頭に置いているとのことであった。通常、並べ替え問題では日本語訳に応じて並べ替えさせることが多いが、西村先生は本文の英文を類似した英文に直してその文を並べ替える解答として、それに対応する対話文を考え、談話としてのつながりを意識して回答させることを考えているとのことであった。また、並べ替え問題では記号でその順を答えさせたり、センターテストのように二番目と四番目に来る単語の番号を回答させたりするのはよくないとのことであった。つまり生徒が英文を書いて英文を意識してリプロダクションすることに意味があると話された。

西村先生は記憶に頼る回答を求めめるのではなく、考えて答えさせる問題作成が大切であると問題作成のポイントを話された。非常に参考になる勉強会であった。

(C) 流れに沿って()内の語句を正しく並べ替えなさい。(2点×5)

1. "Do you know the President's schedule for next week?"
"Well, she (attend / is / is / Rome / the Summit / to)."
2. "I heard George had gone to Hungary. Did you see him off?"
"Yes. When I got to the station, (about / leave / the train / to / was), I was able to say goodbye."
3. "Why don't we go snowboarding?"
"Oh, I don't want to. It's very cold. (computer games / go out / I'd / play / rather / than)."
4. "Did you wash your hands?"
"No, but mine are not dirty."
"You must wash. You (about / be / can't / careful / food poisoning / too / in / summer)."
5. "I'm glad you can come to our party. What about your children?"
"No problem. They (after / see / being / by / looked / my cousin /). He lives nearby."

Lesson 2 Christian the Lion Part 1

下の文には不要な語句がつけられています。それぞれの語句を×で消しなさい。

Shoppers were filled a big London, department store one day in 1960. John and Ace shared with a house in London. They were shopping then for Christmas presents to send to their families in Australia.

While they were shopping, they found a small cage with a baby lion in it for sale! "I've never seen a lion at a department store!" Ace cried out in surprise.

The baby lion was cute but looked really a sad. They felt sorry for the lion in such a small cage. Finally John said, "Let's buy for him."

1- No. Name _____ /5 points



授業の玉手箱

上手は下手の手本なり、下手は上手の手本なり

中垣 芳隆

帯の部分に「教え方を知らない教員」が8割、といささか刺激的な文字に誘われて「残念な教員」と題する新書を購入した。

なかなかアグレッシブな内容であるが、その中に、「教育界では授業力に関して高校教員は小学校教員の足下にも及ばないと言われる。・・・先輩教員に当たり前のように授業を見てもらえる小学校教員と閉鎖空間で王様として振る舞える高校教員では、技量の伸びが異なっても何ら不思議はない。なぜ、高校教員は研究授業、公開授業、授業参観などに対して前向きでないのか。・・・」

はて、確か日本の教師は「授業研究」と「校内研修」という優れた専門家文化を形成していると昔から言われ、筆者も若い頃、同僚教員と相互に授業を見学し忌憚のない意見を交換しいろいろと教えられた記憶がある。しかし成程、TIMSS（国際教育到達度評価学会）の調査結果によれば、「授業研究」と「校内研修」については、小学校では日本は調査対象校の中で中位、中学校では下位、高校では最下位に位置しているらしい。

かつて勤務していた学校で先生方に、「教師としての成長において何が最も有効でしたか」と幾度か聞いたことがあるが、常に「自分の授業の反省」が第一位、「同じ学年や教科における授業参観」が第二位、第三位は「校内研修」と続き、残念ながら「教育委員会主催の研修」は常にそれらの後塵を拝していた。換言すれば教師の成長の契機は、当該の教師自身の授業を中心にして同心円状に拡大していることになる。

表題の「上手は下手の手本なり、下手は上手の手本なり」は世阿弥の言葉であるが、上手はともすれば、自分よりも仕事の能力の低い人や未熟な者からは何も学ぶことがないという「おごり」を抱き、そのことが油断を生みがちであることを心に留めよという戒めと同時に、相手が年上であれ年下であれ、上手であろうが下手であろうが、自分より優れている魅力や、見習うべき点、その人から学ぶべき点は必ず存在するはずであると意味合いであろう。

新しい学習指導要領の目玉はAL（アクティブラーニング）。今回の改訂の最大の眼目は「何を知っているか」にとどまらず、「何ができるようになるのか」を重視するという、知識の量から「資質・能力」（コンピテンシー）へのドラスティックなシフトである。ALを形式的なものにとどまらず、実質化し効果的な授業を展開するためにも、職場の同僚性を醸成し、相互の授業参観を活発に行うことが近道と思われる。

書籍紹介

『英語で大学が亡びるとき—「英語力＝グローバル人材」というイデオロギー』

寺島隆吉 (2015)、明石書店 ¥3,024



グローバル化の進展と共に日本に「英語の世紀」の荒波が押し寄せる中、かなり批判的なタイトルの書籍である。著者は元岐阜大学の教授で、先年、『英語教育が亡びるとき』で英語教育に警鐘を鳴らした人である。本書は、京都大学などでの講演資料や京都大学新聞のインタビュー記事などを再構成してまとめている。

「英語力＝研究力、英語力＝経済力、英語力＝国際力」という神話がまかり通っている。「外国からの留学生は英語による授業を望んでいない、日本の文化・考え方を学びたい」「アメリカを蝕む大学ランキング競争——なぜアメリカの大学教育は劣化しつつあるのか」など刺激的な論考である。鈴木孝夫氏の考えに同調されている寺島氏の主張は、ややもすると現状の英語教育改革の波に流されそうとする際に、自身が考える英語教育の展望と見通しを定かにし、進むべき方向の意味と価値を再確認するための灯台の光となるものである。様々な考えをしっかりと認識し、生徒や学生への英語教育に望みたい。

(中井 弘一)

大阪女学院大学「教員免許状更新講習3」 平成 27 年度講習

平成 28 年3月 4 日(土) 9:10 ~ 16:40

<http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/certificate>

「アクティブ・ラーニングとは何か、英語の授業での方略を考える

・英語の授業とアクティブ・ラーニング：その目的を考える

東條 加寿子 大阪女学院大学 教授

・英語の授業でのアクティブ・ラーニングの方略と導入・活用の工夫

中井 弘一 大阪女学院大学 教授

講座のねらい

アクティブ・ラーニングとは、文部科学省が 2012 年に示した説明によると、「教員による一方的な講義形式の教育とは違って、生徒たちの能動的な参加を採り入れた指導・学習方法の総称」で、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習などが含まれ、教室内での集団議論、討論会、グループ・ワークなども有効な方法だとしている。National Training Laboratories の the “Learning Pyramid” によると、定着率の高い学習方法は“Teaching others”、“Practice”、“Group Discussion”の順で、最も定着率の低い学習方法はただ黙って聞く“Lecture”である。生徒が主体に参加する能動学習といっても形態面に囚われていては、効果はない。本講習では、アクティブ・ラーニングを実質化するための考え方やその工夫を取り上げる。

第一部では、言語活動の充実という観点から、英語の授業の中でアクティブ・ラーニングを捉え直す。そこで、アクティブ・ラーニングは記録・説明・批評・論述・討論などの言語活動を充実させることで思考力や判断力、表現力を育むことを目的としているということ明らかにする。これまでの英語授業における取組みと何がどのように異なるのかを、実践例を挙げながら議論する。

第二部では、アクティブ・ラーニングはなぜ効果があると考えられているのか、また、個々の生徒の学習意欲や学習能力を高めるためにはどのようにアクティブ・ラーニングという学習方法を英語の授業で活用すればよいのか、その方略を中学・高校の英語の教科書などを使った実習を通して参加者と考える。

定員・対象

中学校英語科教員・高等学校英語科教員 計 30 名

(定員を超える場合は申し込み先着順にて締め切り)

受講方法

○ 受講申し込み受付

平成 28 年1月 18 日(月)より平成 28 年2月 19 日(金)までに大阪女学院大学 教員養成センター「教員免許状更新講習」担当(ttc@wilmina.ac.jp)へお申し込みください。

○ 受講料 5,000 円 (所定の口座へ振り込み)



編集後記

シリアからの難民対策がヨーロッパでは膠着状態を迎えている最中、パリで(自爆)テロが相次いだ。グローバル化時代は国家間だけでなく、集団や個人がその脅威にさらされ、報復による連鎖がまた次の脅威を生み出し、無限地獄の様相を見せている。マララさんは、“With guns, you can kill terrorists. With education you can kill terrorism.”と訴えている。教育こそ明日の未来を照らす光であるべきだ。

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher-Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造 2 丁目 26 番 54 号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp